広報はびきの600号 記念コラム

広報はびきの第１号（昭和34.3.1）発行から600号発行までに52年の月日が流れました。第１号では待望の羽曳野市発足の見出しで「祝賀式典（昭和34.1.15）が盛大に行なわれた。」と書かれており、当時の内容は、「古市小学校では500人の児童が人文字でハビキノとつくり、羽曳山では花火が景気よく打ち上げられ、朝日、読売、毎日、産経の各新聞社機が祝賀飛行を行ない、祝いのメッセージを投下した。」と記録されています。半世紀の時を経て600号に達しましたが、各新聞社に祝賀飛行をご依頼することは難しいので、広報の紙面上に「お祝いのメッセージを投下」していただくようにお願いしました。今回は羽曳野市を担当する河南記者クラブ所属の産経新聞社社会部、栗井裕美子記者の視点から羽曳野市を書き下ろしていただきます。

ご紹介にあずかりました栗井です。我々マスコミは、市政のチェックと情報発信機能を担い、羽曳野市とともに歩んできました。600号を迎えましたことを心からお喜び申し上げます。富田林市役所内にある河南記者クラブを拠点に、羽曳野市など南河内地域の取材をしています。赴任して1年3カ月ですが、お世話になっている羽曳野市に寄せる思いをつづりたいと思います。

■正義の味方が原点

羽曳野市のご当地ヒーロー「英雄戦隊コーダイガー」。市民のみなさんがよくご存じのヒーローたちの体験取材が、羽曳野担当としての私の原点となっています。ピンク「プリンセスタチバナ」は私の〝分身〟ともいえる存在です。活動の面白さを伝えたくて取材を重ねる中で、羽曳野市の人、風土にも触れ、その魅力を次々と発見しています。

■歴史遺産の街

コーダイガーのヒーローたちは、古市古墳群に墓がある「日本武尊」をモチーフにレッド「タケル」、日本武尊の妃、「弟橘姫」からピンク「プリンセスタチバナ」と、古市古墳群にゆかりのある歴史上の人物などから「シナジー」を受けて、誕生しました。日本武尊が死後に白鳥になり、古市古墳群に舞い戻ったとされる「白鳥伝説」から、レッドの衣装には白鳥の翼のデザインがあしらわれています。前方後円墳が多数現存しているのは、とても貴重なことです。未来を担う子供たちに親しんでもらって、遺産の継承につながればと願っています。

コーダイガーの結成のきっかけは、平成16年発生の新潟県中越地震の被災地の子供たちを元気づけるためでした。逆に、そのときの子供たちの満開の笑顔に励まされ、いまも活動を継続しています。地元の羽曳野市では、5月開催の「はびきの市民フェスティバル」に毎年出演し、たくさんの羽曳野キッズが来てくれます。近隣や関西国際空港、奈良県にも活動を広げていて、10月9日㈰には大阪市の一大イベント「御堂筋Kappo」に初出演します。

■河内人の人情味

メンバーは、羽曳野青年会議所のＯＢさんがほとんどです。40歳前後のオジサンたちの活動を追うなかで、「河内人」の気質や人情に触れています。私は大阪市出身で、記者としての前任地が奈良県だったことなどもあり、当初は河内人らしさが理解できず、戸惑っていましたが、最近はなんとなくつかめてきました。一度仲良くなると、とっても温かい。仕事、プライベートの区別なく、興味を示してくれて、親身になってくれます。でも、いまだに慣れないのは、「けなす文化」。あえて批判するのが愛情表現の一種らしいですが、冷水を浴びせられたようなショックを受けることが多々あります。まだまだ勉強不足で、「悪気はなかってん」と流せる余裕はありません（笑）。河内のオジサン方は、そんな私を温かく見守ってくださっています。

■羽曳野の大好き！

羽曳野市のお気に入りは、コーダイガーや古墳に限りません。ブドウ、ワイン、イチジク、イチジクソース、梅酒、ハム、さいぼし…。ＬＩＣはびきのでは毎夏、羽曳野産が堪能できるフードフェアを開催しています。

そのほか、焼き肉店の食べ歩きも楽しいですし、和菓子の名店は要チェックです。羽曳野の大好きをもっと発掘し、発信していきたいです。